4.平成8年度に注意を要する病害虫

北海道病害虫防除所

1.はじめに

北海道病害虫防除所、道立各農業試験場および道農業改良課等で実施した病害虫発生予察事業並びに試験研究の結果から平成8年度に特に注意すべき病害虫について報告する。

2.平成7年度に新たに発生または命名された病害虫

病害10種、害虫6種の概要を表1に示す。

3.平成7年度に多発した病害虫

平年に比して、やや多発～多発した病害虫を表2にまとめた。多雨・多湿経過により、病害の発生が目立ち、虫害は少なかった。

4.平成8年度に特に注意を要する病害虫

1)水稲のいもち病

葉いもちの初発は平年並であったものの、6月末～7月上旬の日照不足により稲の生育が軟弱気味であったこと、加えて7月下旬～8月上旬は多雨・寡照に経過したことから発病に好適条件となった。このため病勢は急激に進展し、多発生圃場やズリコミ田も数多く見られるなど、近年にない広域的な多発生となった。出穂期後の8月中～下旬も曇天に経過したため種いもちの発生は助長され、葉いもちと同様に広域的な多発生となった。また、断続的な降雨により、防除適期を失したことも多発の一因と考えられる。発生面積率は葉いもち25%(平年4%)、種いもち20%(平年6%)とそれぞれ平年の6倍、3倍にも及んだ。また、近年「きらら397」での発生が目立っていることから、本品種における発生動向に十分な注意が必要である。

このようなことから、罹病籾や罹病稲わらでの伝染源密度は高いと考えられるので、種籾消毒を徹底するとともに、窒素質肥料の多用を避けるなど、適切な肥培管理を行うとともに、早期発見に努め、適正防除を心掛けることが大切である。

2)小麦の縞萎縮病

平成3年頃から発生が認められた病害で、土壌菌*Polymyxa graminis*により媒介されるウイルス病である。病徴は葉身がかすり状の退緑斑点となったり、葉身の約半分程度が黄白色となり、草丈も低くなる。症状は起生期から観察され、発病適温は10～15℃とされている。また、本病の感受性は品種によって異なることが報告されている。平成7年は胆振地方の数圃場で発生が認められ、特に新品種「ホクシン」で発病程度が著しかったことから、同品種の感受性は高いと考えられる。発生地域は石狩、胆振および空知南部の極く一部の圃場に限られているが、今後発生圃場の拡大が懸念される。本病の防除対策については明らかにされていないので、当面、発生が認められた圃場では「ホクシン」以外の品種を作付けする。

3)馬鈴しょの疫病

本年の発生面積率は60.2%(平年44.5%)、被害面積率は15.6%(平年6.3%)と全道的に近年にない多発となった。特に桧山、後志、胆振、十勝および網走で被害が大きかった。本年は6月の低温経過と6月中旬～7月中旬の寡照が本病菌の活動に好適な条件であったほか、馬鈴しょの生育が徒長ぎみであったことから、6月下旬～7月上旬に各地で早発した。また、その後の発生も8月の断続的な降雨で急激なまん延が見られ、被害が増大した。加えて、降雨は9月上旬まで続いたことから、塊茎腐敗も各地で多発した。

従って、本病の種いも保菌率は極めて高いと考えられることから、種いもは十分厳選して使用することが望ましい。また、気象条件が発病に好適となった場合、6月下旬より早発する恐れが十分考えられることから、この時期の気象予報および予察情報などに注意し、薬剤の防除適期を失しないよう努めることが肝要である。

4)馬鈴しょのジャガイモシストセンチュウ

本線虫は昭和47年に後志支庁管内真狩村で発見されて以内、網走、胆振、根室および渡島支庁管内で順次発生し、平成6年までに15市町村の7,722haに達している。

平成7年7月20日の植物検診を、発生地域では植物および土壌検診が義務づけられており、これを継続することが防除対策上極めて重要である。植物検診は雌成虫を肉眼で判定する方法であるが、黄色または黄金色の雌成虫の最も多い時期、すなわち検診の適期は、道央及び道南地域では7月上～中旬、道東及び道北地域では7月中～下旬である。これ以降は褐色のシストとなり、急速に根から離脱するため判定不能となる。各地の実施状況をみると、この適期を外れる事例もあるが、検診時期を厳守することが重要である。また、調査場所は塊茎の堆積場所や畑に入る通路沿いの部分を主体とし、生育不良や葉の黄化している株を選ぶことが大切である。

表1　　新たに発生または命名された病害虫

作目	病害虫名	病原菌・虫害の学名	病徴・加害
ネギ	小菌核病	*Ciborinia allii*	縦長で輪郭不鮮明な退色大型病斑
ゴボウ	そうか病	*Streptomyces turgidiscabies*	根部の隆起した黒褐色のあばた病斑
ベゴニア	斑点細菌病	*Xanthomonas campestris* pv.begoniae	葉縁からの水浸状腐敗
グラジオラス	赤斑病	*Curvularia gladioli*	円形あるいは紡錘形の赤褐色病斑
アスター	萎ちょう病	*Fusarium oxysporum* f.sp.callistephii	黄化・萎凋・胚軸部の褐変
キク	赤かび病	*Fusarium avenaceum*	花蕾の紅色腐敗
カーネーション	芽腐病	*Fusarium poae*	花弁の水浸状腐敗
ストック	半身萎ちょう病	*Verticillium dahliae*	下葉の黄化、株の萎凋
スカビオサ	灰色かび病	*Botrytis cinerea*	地際部茎の褐色病斑、立枯・枯死
エローサルタン	灰色かび病	*Botrytis cinerea*	地際部茎の褐色病斑、立枯・枯死
ネギ	ナミハダニ	*Tetranychus urticae*	葉の白色かすり症状
レタス	ヒトリガ	*Arctia caja phaeosoma*	葉の食害
シュンギク	ナモグリバエ	*Chromatomyia horticola*	線状の食害痕
ジュン菜	ジュンサイハムシ	*Galerucella nipponensis*	水面の浮葉の不規則な食害
ジュン菜	ユスリカの1種	*Pentapedilum utonaiprimum*	水中の寒天質、若葉をトンネル状から線状に食害
ルドベキア	マメハモグリバエ	*Liriomyza trifolii*	葉への寄生被害

表2　　平成7年にやや多発～多発した病害虫

作目	病害虫名
水稲	いもち病(葉、穂)、褐変穂、葉しょう褐変病、にせいもち病、セジロウンカ、イネミズゾウムシ
小麦	うどんこ病、赤かび病、ムギキモグリバエ
大豆	菌核病、べと病、茎疫病
小豆	菌核病、茎疫病、炭そ病、タネバエ
菜豆	菌核病、灰色かび病、タネバエ
馬鈴しょ	疫病、塊茎腐敗、そうか病、軟腐病
てん菜	葉腐病、ヨトウガ(第1回)
リンゴ	腐らん病、ハマキムシ類、モモシンクイガ
タマネギ	白斑葉枯病、軟腐病、ネギアザミウマ
ネギ	ネギアザミウマ
キャベツ	軟腐病
トマト	灰色かび病
ナス	菌核病

目次へ戻る